

吉村 昇

Interviewer

進研アドBetween編集長

長田雅子

資源の獲得交渉を行い
日本の国益を担う人材を
秋田の地から送り出したい

秋田大学は吉村昇学長の強いリーダーシップの下、「仮想」国立「国際資源」大学を設立するという意気込みで国際資源学部の開設に取り組んでいる。秋田大学のミッション、およびガバナンスの改革について吉村学長に聞いた。

地域の特性に合った人材育成が今こそ必要

長田 学長として6年目を迎えていらっしゃるんですが、就任当初はどんな大学づくりをお考えでしたか。

吉村学長(以下吉村) 経済が右肩上がり成長した時代とは異なり、人材育成の目標には、大学ごとの特色を出すべきではないかと考えていました。その発想の原型は明治時代にまで遡ります。明治の末、政府は日本各地に特色ある官立の専門学校を設立しました。本学の前身である秋田鉱山専門学校もその一つで、当時の政府には、それぞれの土地に合った人材育成を進めるべきという発想があったわけです。学長就任にあたり、もう一度原点に立ち返って大学づくりを進めよう、その施策の一つとして資源系の学部をより特色あるものにしたいと思いました。

そのために、外部資金の獲得による教員採用、国際資源学教育研究センターの設立によるボツワナやモンゴルなどの海外の大学への協力、JICA(国際協力機構)との提携による資源系技術者の養成などに取り組みました。

2012年度の文部科学省国立大学改革強化推進事業に、本学の「国際的資源学の世界的教育拠点形成及び次世代型学部運営の体現」が選定されました。この事業を通して、日本の資源確保戦略に貢献する人材を育てる国際的な教育拠点の形成、そして、教授会改革による社会に開かれた学部運営体制の整備に取り組んでいく方針です。

長田 秋田大学におけるミッションの再定義について、どのようにお考えですか。

吉村 2014年度の学部改組構想では、

新設する国際資源学部、学校教育課程と地域文化学科から成る教育文化学部、4学科から成る理工学部、そして医学部の4学部構成をめざしています。国際資源学部が国際的な教育拠点をめざすミッションを背負う一方、教育文化学部、理工学部、医学部は、地域の発展に寄与することがミッションです。秋田県の子どもたちは非常に優秀です。子どもたちの育成に関わる教員、県経済を牽引するような起業家、地域医療を担う医師や看護師を養成するといったことが求められています。

オールジャパン体制で資源学の拠点を形成

長田 国際資源学部は、どんな特徴を持つ学部となるのでしょうか。

吉村 英語教育が第一の特徴です。入学後の1年半、IEAPという大学英語教育プログラムによって、少人数教育で英語力とコミュニケーション力を徹底的に鍛えます。これは同じ秋田県にある国際教養大学と同様のプログラムです。全学共通の教養基礎教育以外の専門教育は英語で実施し、さらに海外資源フィールドワークを必修とします。これは、4週間程度、海外の大学や事業所などで実習を積むというもので、JICAや資源系の企業からも協力の申し出を受けています。

基礎・専門に加え、語学力を磨き、日本の国益を担う人材として海外に出向き、資源獲得のための交渉を行える「グローバル資源人材」を育成したいと思います。そのためにも、7割近くは大学院に進学させ、博士前期課程のうち1年は交換留学生として海外で語学力をさらに高めてもらうといったこと

も考えています。交換留学で受け入れた学生は博士後期課程まで本学で過ごし、やがてそれぞれの国に帰ってから、日本のファン、秋田のファンとして、日本の資源の獲得に協力してもらいたいという思いもあります。

日本にはこれまで、資源はお金を出して買えば済むという考えがあり、資源獲得のための人材を育てるという考え方は軽視されてきました。そのため、若い研究者が少なく、技術者を育てる教員も不足しています。これでは日本の国益は守れません。資源学に取り組む全国の大学と連携して強みを結集し、オールジャパンの体制で人材を育てるのが、国際資源学部なのです。国際教養大学などと共に、「グローバル人材輩出県・秋田」をめざしたいと思います。

長田 国立大学改革強化推進事業では、「社会に開かれた学部運営体制の整備」も掲げていますが、具体的にはどのような改革を行うのですか。

吉村 教授会の役割を学生の入学や卒業認定などの審議に限定します。そのうえで、教育課程の編成や教員の人事等を審議する教育研究カウンスルと、学部の予算や組織の設置・廃止などを審議する学部運営カウンスルを設け、メンバーの半分は学外委員で構成することとしています。

私は学部長を9年間経験していますので、教授会の権限の大きさは身に染みています。新しいことを進めるには、トップダウンの意思決定が重要です。正しい方向を見定め、意思を固めたのなら、それを通せないようでは改革は成し遂げられない、という思いがありました。組織は常に夢と目標を持っていなければなりません。国際資



よしむら・のぼる 1943年新潟市生まれ、秋田市育ち。1969年秋田大学大学院鉱山学研究所電気工学専攻修士課程修了。秋田大学鉱山学部助手、教授、鉱山学部長、工学資源学部長を経て2008年から現職。主な著書に「水の特性と新しい利用技術～農業・食品・医療分野への応用～」(共著)など。専門は基礎電気工学。工学博士。

源学部の開設という夢と、グローバル資源人材の育成という目標を実現させるには、それにふさわしい学部運営体制が必要だと考えたのです。

学生だけでなく教職員にも覚悟が必要

長田 国際資源学部への入学をめざす高校生には、相当の覚悟が求められると思いますが、いかがでしょうか。

吉村 卒業後は海外に出て、世界を舞台に働くのですから、確かに覚悟は必要でしょう。就職が気になるという受験生もいるでしょうが、グローバル資源人材としての力を身に付ければ、就職は後から付いてきます。学部創設について、資源系企業や商社を対象にニーズ調査を実施していますが、その結果を見ても、将来についてそれほど心配はいらなんでしょう。学部卒業後は大学院に進学し、さらに力量を高めてほしい。学生だけでなく、私たち教職員も強い覚悟を持って、この国際資源学部という新たな取り組みを成就させたいと思います。

高校教員の皆さんに、学部改組につ

いてお話しする機会がありますが、国際資源学部で求められる英語力について心配する声を聞きます。もちろん、大学での英語教育に耐え得る基本的な英語力は必要でしょうが、遅かれ早かれ英語で授業を行うことが当たり前の時代がやってくると考えれば、英語ばかり気に掛ける必要はないと思います。資源に関するさまざまな知見が集結する国際資源学部に全国から学生が集まり、世界レベルの資源学を学び、世界のフィールドに羽ばたいてほしい。それが私の願いであり希望です。

長田 国際資源学部の誕生は、他の学部・学科にも良い影響を与えるのではないのでしょうか。

吉村 英語教育を軸とした連携が考えられます。教育文化学部には言語系の教員がいますので、語学教育での連携を深めたいと思います。新設する予定の国際資源学研究所への進学者が現れるかもしれませんね。理工学部についても同様です。医学部の保健学科では、高齢化の著しい秋田県に貢献する質の高い看護系人材の育成はもちろん、海外で活躍する人材の育成も可能だと思っています。